



薪炭林の活用と天然更新に導く整備

当クラブは2013年に設立され、森林整備・自然体験・里山資源を用いた有機農業などをテーマに市民に体験の場を提供する、という活動を続けています。

私自身は林業会社の経営者で、自社林で採取した原木を使って、薪・炭・ホダ木・木酢液を生産・販売しています。白老の山はもともと広葉樹の森ですから、樹液の採れるイタヤカエデが多く、クラブ主催でカナダから講師を招き、メイプルシロップ作りの講習会を開いたこともあります。

クラブの活動地は、白老町石山地区の私個人の所有林です。全20haのうち、5haほどを切り拓いて有機農業の畑地にしています。この山は古くから薪炭材やチップ材の生産などで伐採が繰り返されてきた二次林ですが、近年はどのエリアもエゾシカの食害があり、ササの繁茂が激しく、天然更新が充分ではない状態になっていました。

そこで2014年にクラブ内に「里山部会」を発足させ、交付金を活用して2.5haのエリアで雑草木や枯損木の除去作業を行ない、イタヤカエデの樹液採取、炭焼きやホダ木作りの体験イベントを実施しました。

2017年度からは活動面積を11.5haに拡大し、下刈りと枯損木・風倒木の除去と間伐を進めています。

徹底的なササ刈り後にミズナラが成長

林内での作業は非常にオーソドックスで、愚直にひたすらササを刈り込んでいます。森を天然更新(下種更新)で再生しようとする時、ササはたいへんな障害物なのです。

たとえば択伐を行なった直後、明るくなった林床に実生(ドングリなどタネから発芽したばかりの幼樹)を見つけたとします。でもそのまま1年、2年と放っておくと、3年目には一面がササに覆われて、幼樹は消えてしまいます。

ササは6月～8月に刈るのが効果的で、2年目以降はササの茎が細くなって効率良く作業できるようになります。3年間刈り続けるとササの勢いは弱まり、特に日陰ではほとんど再生してきません。そうやって徹底的にササ刈りをした林床で、ようやくミズナラの新しい幼樹を確認することができました。2.5haのササ刈り費用は年間40万～50万円です。

またササ刈りによって、林内を安全に楽に散策でき

るようになりました。うちの山はボリボリ(ナラタケ)がよく出るので、きのこ狩りを楽しめる森になりました。

きのこといえば、春に開くホダ木作り講習会は人気が高く、町の広報誌や新聞に案内を載せると、会員以外にも多くの参加者が集まります。白老には、きのこ種菌メーカー大手の森産業(群馬県)の東日本支社があり、講習会には同社から講師を招いて解説してもらっています。きのこ栽培に詳しいアマチュアの方はたくさんおられると思いますが、プロのお話はやっぱり違いますね。今後も同社に協力を頼んでいきたいと思っています。

いっそうの広葉樹の天然更新を促すために、今後は、ササ刈りを終えたエリアに、山採りした実生を移植する計画を立てています。その際、食害を防ぐために、交付金を利用してシカ除けのフェンスを導入したいと考えています。ネット式の防除柵ではシカが絡まってしまうことがあるので、違う資材を検討しているところです。

エリアの一角には、私の会社の炭焼き場や、薪の生産拠点もあります。クラブの会員から長期間にわたり仕事をしたいという希望があれば、私の会社で雇用するなどしており、しらおい村づくりクラブの森林活動が、地元の山仕事のネットワーク形成にもつながっているな、と感じています。



報告者

大西 潤二さん

